Ⅲ 遺　　物

1．土　　器（PL.12～14）

調査区全域から、多量の奈良時代土師器・須恵器の他、墨書土器・土馬や製塩土器が出土した。他に13世紀代の瓦器が少量ある。遺構以外に、調査区南半で厚く堆積する遺物包含層からも多く出土した。量的には須恵器が多く、時期的には奈良時代中頃から後半にかけてが中心である。以下、土器の説明は、遺構で数量的にまとまるものをとりあげる。これらの年代は、井戸ＳＥ0540出土土器が奈良時代中頃、井戸ＳＥ0600出土土器が奈良時代中頃～後半、土壙ＳＫ0625出土土器が奈良時代前半～中頃、土壙ＳＫ0665出土土器が奈良時代中頃、道路ＳＦ0529の側溝ＳＤ0525・ＳＤ0530出土土器が奈良時代中頃に属する。

ＳＥ0540出土土器（fig.17･18, PL.12）井戸掘形から土師器杯Ａ(註)・杯Ｂ・皿Ａ・高杯・甕Ａ、須恵器杯Ａ・杯Ｂ・杯Ｂ蓋・椀Ｂ・鉢Ａ・鉢Ｄ・壺・甕Ａ・甕Ｘ、土馬、製塩土器、井戸枠内埋土から土師器杯Ａ・皿Ａ・皿Ｃ・高杯・甕Ａ・甕Ｘ、須恵器杯Ａ・杯Ｂ・高杯・鉢Ｄ・壺Ｅ・壺Ｌ・横瓶・甕Ａ、製塩土器が出土した。fig.17の２・４・８が掘形出土の他は井戸枠内出土である。器種も豊富で、墨書土器も含み、一括資料として重要である。

土師器　皿Ａ(11)は口縁部を横なでし、底部外面不調整で、螺旋・斜放射暗文がある。底部外面中央には「依田佐良」の墨書がある(PL.14)。皿Ｃ(10)は口縁部横なで、底部外面不調整である。灯火器に使われ、口縁端部３ヶ所に煤が付着する。甕Ａ(12)は体部外面にハケメを施し、口縁部外面から肩部にかけて横なでするが、ハケメが残る。口縁部内面は横方向のハケメ、体部内面はなでる。甕Ｘ(13)は「く」の字状に開く口縁部と細長い体部からなり、底部は平底である。口縁部外面は横なでするがハケメが残る。体部外面上半は斜方向のハケメ、下半は縦方向のヘラ削りを施す。口縁部内面は横方向のハケメ、体部内面のハケメは上部が斜方向、中央部が縦方向、下部が横方向である。底部外面はなでる。

須恵器　杯Ａ(５)は底部外面から口縁部下半までロクロ削りする。６は底部外面ヘラ切りの後、なでを加える。杯Ｂには底部外面ロクロ削りするもの(１)と、ヘラ切りのままのもの(２)がある。椀Ｂ(８)は長い口縁部が垂直に近くたちあがり、高台は底い。口縁部外面下半をロクロ削りする。底部外面はヘラ切りの後、なでる。高杯(３)は杯部を欠く。裾部内面に「田部□(在カ)嶋」の墨書がある。壺Ｅには大型で平底のもの(７)と、高台をもつもの(９)がある。７は底部外面から体部外面下半をロクロ削りする。９は体部外面は肩以下ロクロ削りで、肩の稜は鋭い。壺Ｌ(14)は体部が球形で、肩以下ロクロ削りする。底部外面はなでる。頸部に凹線が１条ある。16は卵形の体部で、肩以下ロクロ削りする。底部外面はロクロ削りする。頸部に凹線が２条めぐる。15は肩がやや張り、櫛歯状の刺突文がある。体部下半はロクロ削りする。底部の高台接合部には、指おさえの凹みが一周する。底部外面はヘラ削りである。横瓶は体部片で、図示していないが、内面の当板の同心円文の中心は✷形である。甕Ａ(17)は口縁部横なでし、体部外面は平行叩き目を施すが、上半部はカ

fig. 17　SE0540出土土器（Ⅰ）

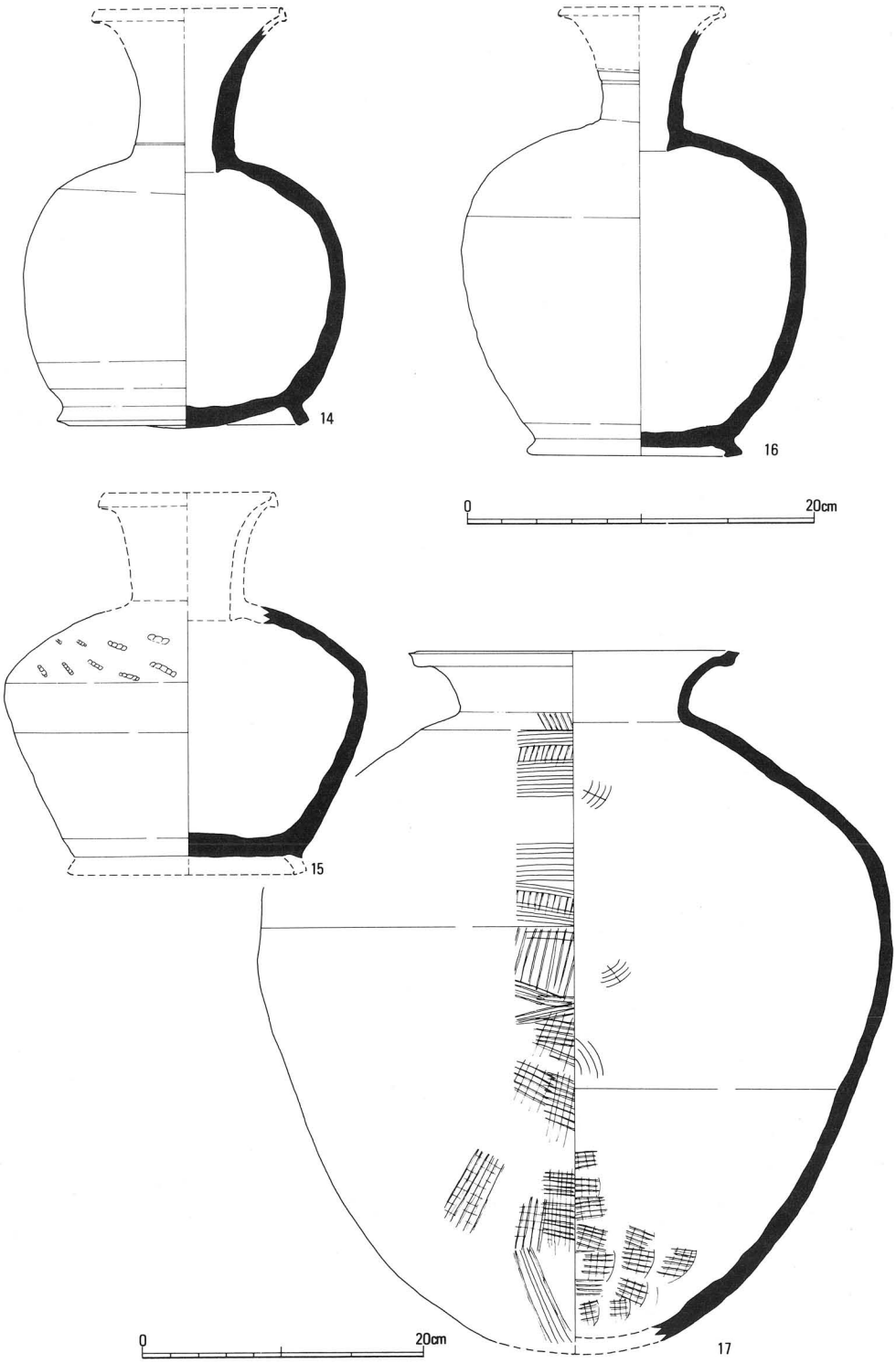

fig. 18　SE0540出土土器（II）

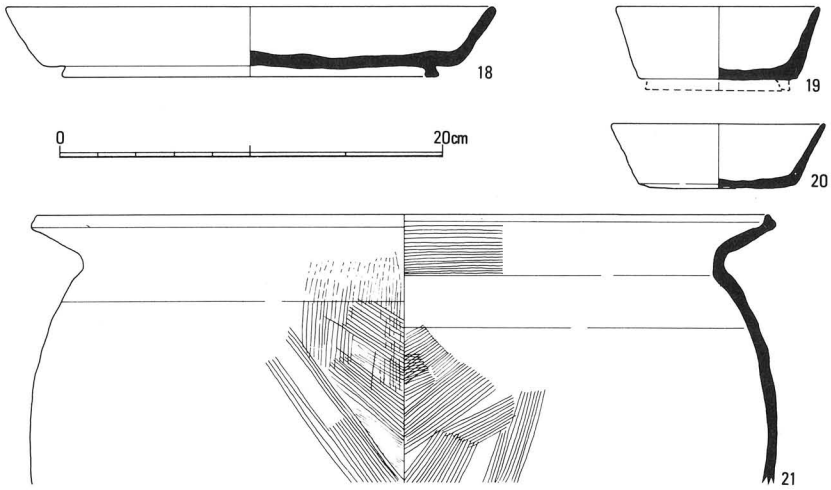

fig. 19　SE0600井戸枠内出土土器

キメ、下半部はなでにより消している。体部内面は上半部が当板の同心円文をなでで消す。下半部もなで調整するが、部分的に叩き目が残る。甕X(4)はやや外反する短い口縁部に、長い体部がつく。口縁部は回転を利用してなで、体部上半の平行叩き目は横方向のなでで消している。下半は斜方向の平行叩き目が残る。体部内面は横方向になでる。

ＳＥ0600出土土器(fig.19･20, PL.13)　井戸掘形から土師器杯Ａ・杯Ｂ・皿Ａ・椀Ａ・盤Ｂ・高杯・甕Ａ・かまど、須恵器杯Ａ・杯Ｂ・杯Ｂ蓋・杯Ｃ・皿Ｂ・皿Ｃ・盤Ａ・鉢Ａ・鉢Ｄ・壺・壺Ａ蓋・平瓶・甕Ａ・甕Ｂ、製塩土器、井戸枠内埋土からは土師器杯Ａ・皿Ａ・皿Ｃ・高杯・甕、須恵器皿Ｂ・盤・壺・甕、製塩土器が出土した。掘形からの出土量が多い。井戸のつくりかえによるものであろう。

土師器　杯Ｂ(26)は外面をヘラ削りした後、口縁部にヘラ磨きを施す。23は口縁部が大きく開く浅い器形で、外面をヘラ削りし、細かいヘラ磨きを施す。口縁部内面上部もヘラ磨きする。底部に螺旋暗文、口縁部には斜放射暗文と螺旋暗文を重ねている。皿Ａ(24)は外面をヘラ削りする。25は口縁部を横なで、底部外面ヘラ削りである。皿Ｘ(22)は口縁端部が外側に肥厚する。口縁部横なで、底部外面不調整である。盤Ｂ(27)は口縁端部が強く外反し、内側に巻き込む。保存状態が悪く、調整手法は不明である。甕Ａ(21)は大型で、口縁部外面を横なでするが、ハケメがわずかに残る。内面は横方向のハケメを施す。28は小型で、口縁部は横なでし、体部外面はハケメをなでによって消している。

須恵器　杯Ａには底部外面から口縁部下半をロクロ削りするもの(30・31)と底部外面ヘラ切りのままのもの(20)とがある。杯Ｂ(19・32)は底部外面ヘラ切りのままである。19は高台がはずれた後、底部外面を磨る。杯Ｂ蓋(29)は頂部外面ヘラ切りのままである。杯Ｃ(35)、皿Ｃ(34)は焼成が悪い。ともに底部外面ヘラ切りのままである。皿Ｂ(18)は底部外面をロクロ削りする。壺Ａ蓋(33)は頂部外面ヘラ切りのままである。鉢Ｄ(37)は体部外面下半から底部をロクロ削りする。体部外面に火襷がある。平瓶(36)は体部外面をロクロ削

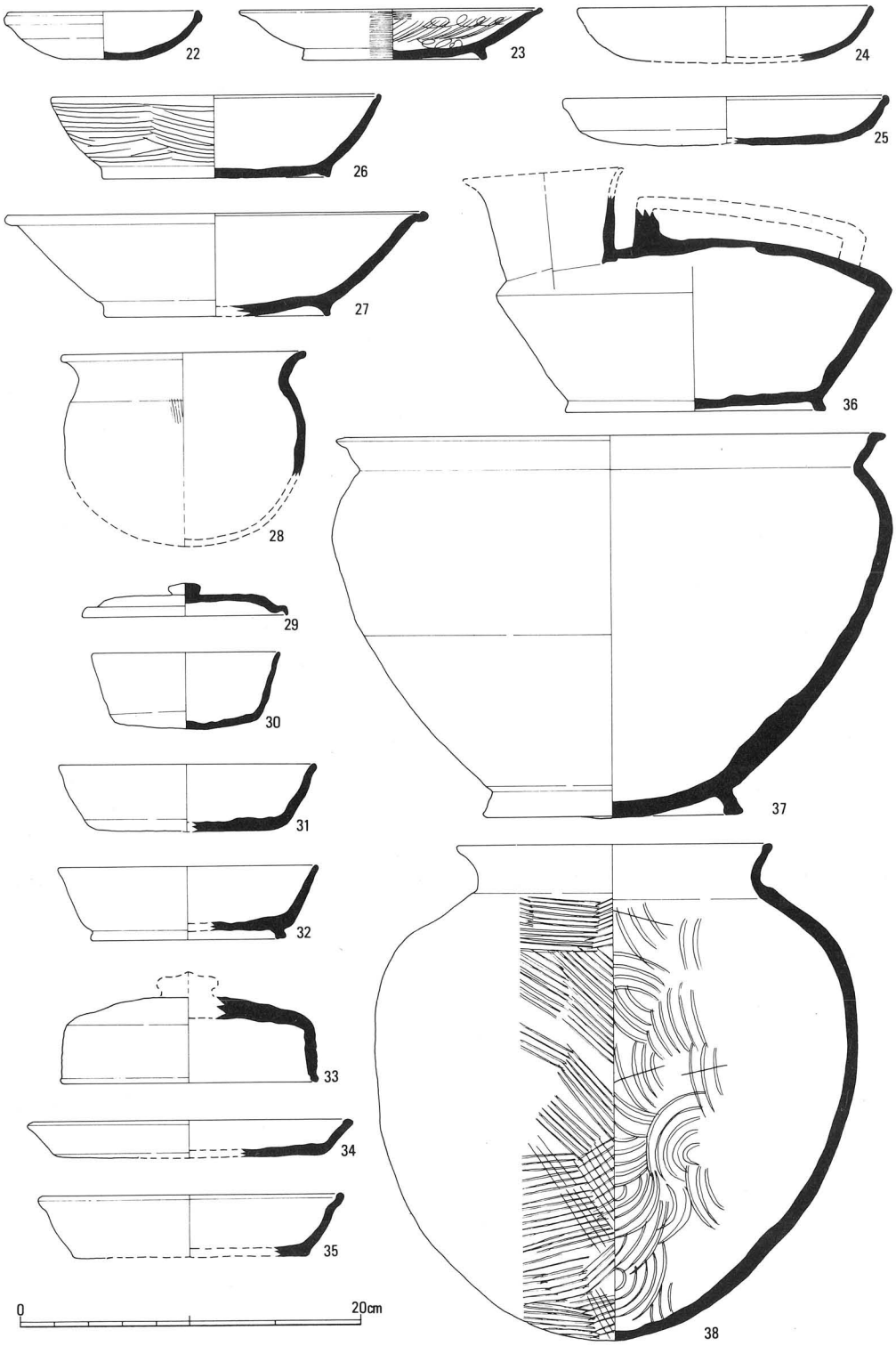

fig. 20　SE0600井戸掘形出土土器

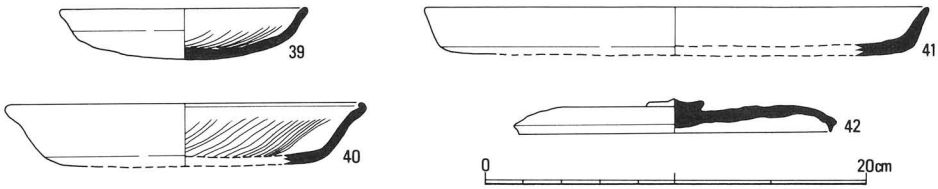

fig. 21　SK0665出土土器

りし、ロクロなでを加える。甕B(38)は口縁部をロクロなでし、体部外面は肩部に横方向、肩以下は斜方向の平行叩き目がある。内面は当板の同心円文が残る。

ＳＫ0665出土土器（fig.21）　土師器杯Ａ・杯Ｂ・皿Ａ・椀Ａ・高杯・壺・甕Ａ、須恵器杯Ａ・杯Ｂ・杯Ｂ蓋・皿Ａ・壺・壺Ａ蓋・甕の他に、少量の製塩土器がある。

土師器　杯Ａ(40)は口縁部は横なで、底部外面はヘラ削りで、螺旋・斜放射暗文がある。杯Ｃ(39)は口縁部を横なでし、底部外面不調整で、螺旋・斜放射暗文がある。

須恵器　杯Ｂ蓋(42)は頂部外面ヘラ切りのままである。皿Ａ(41)は硬質で、底部外面はロクロ削りする。

ＳＫ0625出土土器（fig.22, PL.13）　土師器杯Ｂ・皿Ａ・高杯・甕Ａ・甕Ｂ、須恵器杯Ａ・杯Ｂ・杯Ｂ蓋・椀Ａ・鉢Ｆ・壺Ａ・壺Ｋ・甕Ａ・甕Ｂがある。土師器は小片である。

須恵器　杯Ａ(46～48)は底部外面ヘラ切りのままである。杯Ｂには法量の大きいもの(45)と小さいもの(44)とがある。44は底部外面をロクロ削りし、45はヘラ切りのままである。椀Ａ(43)は口縁部が直線的にのびる。底部外面から口縁部外面下半をロクロ削りする。

ＳＤ0525・ＳＤ0530出土土器（fig.22, PL.13）　土師器杯Ａ・杯Ｃ・皿Ａ・皿Ｃ・椀Ａ・高杯・壺Ｂ・甕Ａ・甕Ｂ・かまど、須恵器杯Ａ・杯Ｂ・杯Ｂ蓋・皿Ａ・皿Ｂ・皿Ｂ蓋・鉢Ａ・鉢Ｆ・壺Ａ・壺Ｄ・壺Ｅ・壺Ｌ・横瓶・甕Ａ・甕Ｘの他、製塩土器がある。

土師器　いずれも保存状態はよくない。杯Ａ(51)は外面ヘラ削りの後に施したヘラ磨きがわずかに残る。杯Ｃ(49)・皿Ｃ(50)は口縁部を横なでし、底部外面は不調整である。

須恵器　杯Ａには口径の割に器高の高いもの(56)と、低いもの(57)とがある。底部外面はともにヘラ切りのままである。杯Ｂ(52)は口縁部のたちあがりが大きい。60・61は底部外面ヘラ切りのままである。杯Ｂ蓋(58・59)はともに笠形の器形で、58は頂部外面のほぼ全面をロクロ削りし、59は上面だけロクロ削りする。皿Ｂ(53)は口縁部が垂直に近くたち、底部との稜が明瞭である。鉢Ａ(54)はいわゆる鉄鉢形の器形であるが、保存状態が悪い。壺Ａ(55)は肩以下の体部外面をロクロ削りする。肩から口縁部にかけて灰をかぶる。壺Ｅ(62)は口縁部がやや内傾気味である。甕Ｘ(63)は「く」の字状に開く口縁部に、長い体部がつく。体部外面はロクロ回転を利用したカキメを施す。

土馬（PL.14）　ＳＢ0570の北西隅柱掘形出土である。四足は大きく開き、尾がはねあがる。目は竹管を押して表現し、頭部に粘土小板を貼って耳を表わす。全長15.2ｍ、高さ13.0㎝。他に、ＳＥ0540掘形から頸部片１点、小柱穴・遺物包含層から２点の脚部片がある。

（註）　以下、器種の表現は『平城宮発掘調査報告Ⅶ』に従う。

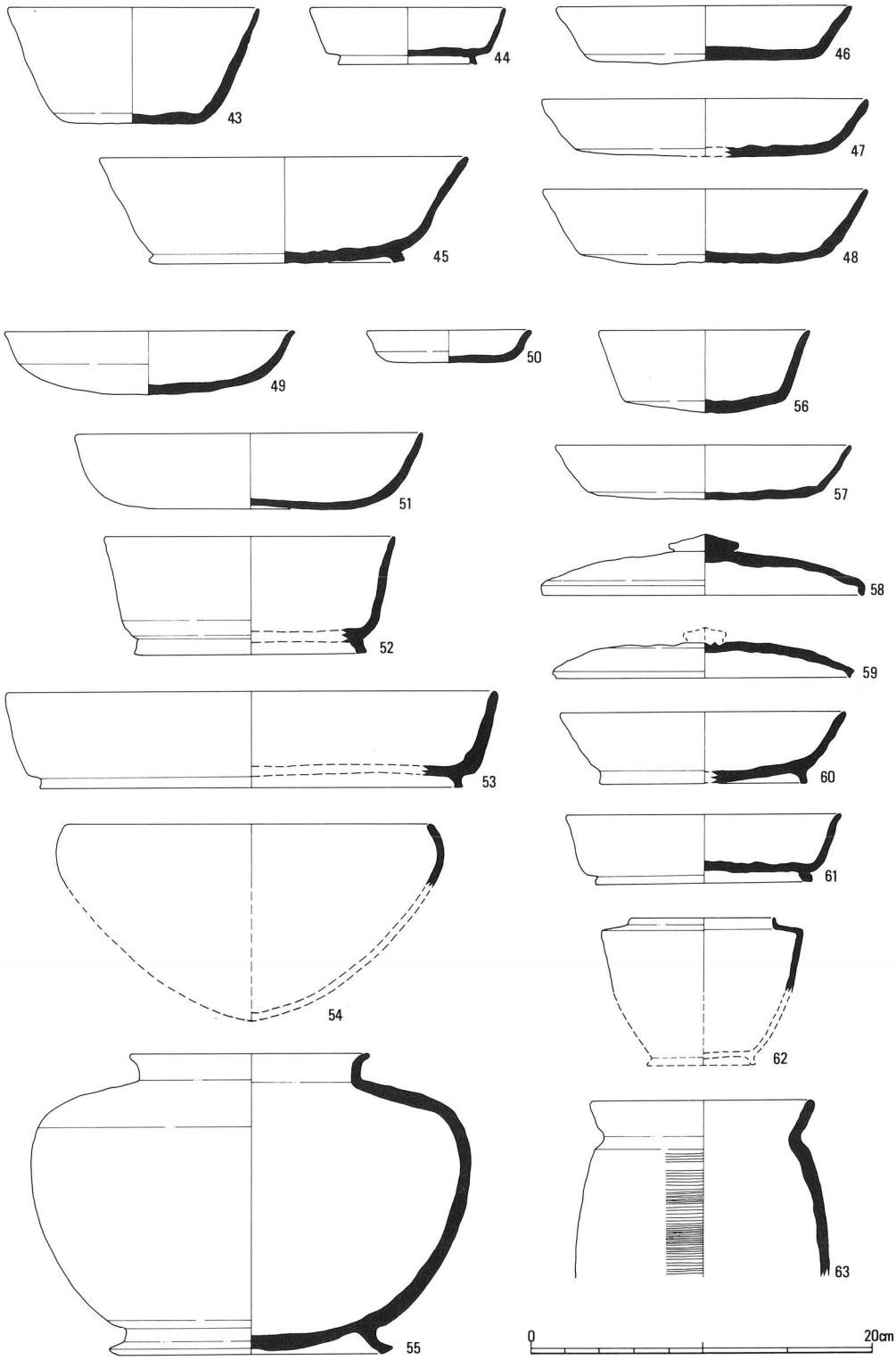

fig. 22　SK0625、SD0525・SD0530出土土器

2．瓦（PL.15）

瓦は整理箱約30杯分が出土した。軒瓦16点（軒丸瓦８点、軒平瓦８点）のほかは丸瓦と平瓦の破片である。以下の記述では奈良国立文化財研究所の設定した型式番号を用いる。

ＳＤ0525……軒丸瓦6282Ｂ１点(３)と軒平瓦6647Ｃ１点(４)が出土した。ＳＤ0527……軒丸瓦２点が出土した。6273Ｃ(１)と型式不明の小片１点である。ＳＥ0504……軒丸瓦(小片で型式不明）１点と軒平瓦４点が出土した。軒平瓦は6646Ｆ(５)２点、6721Ｇ(６)、6732Ｃ(７)各１点である。ＳＥ0600……井戸枠内から軒平瓦6641Ｃが１点出土している。ＳＫ0710……軒丸瓦6131Ａ(２)が１点出土した。包含層……軒丸瓦6281Ｂ、軒平瓦6664Ｆ、鎌倉時代の軒平瓦(８)が各１点、型式不明の軒丸瓦小片２点がある。

以上のうち１・４・５および6641Ｃ型式は平城宮では708～721年頃に、３・４は745～756年頃に編年されており、8(西大寺に出土例がある)をのぞいてすべて平城宮の出土瓦と同笵の関係にある。

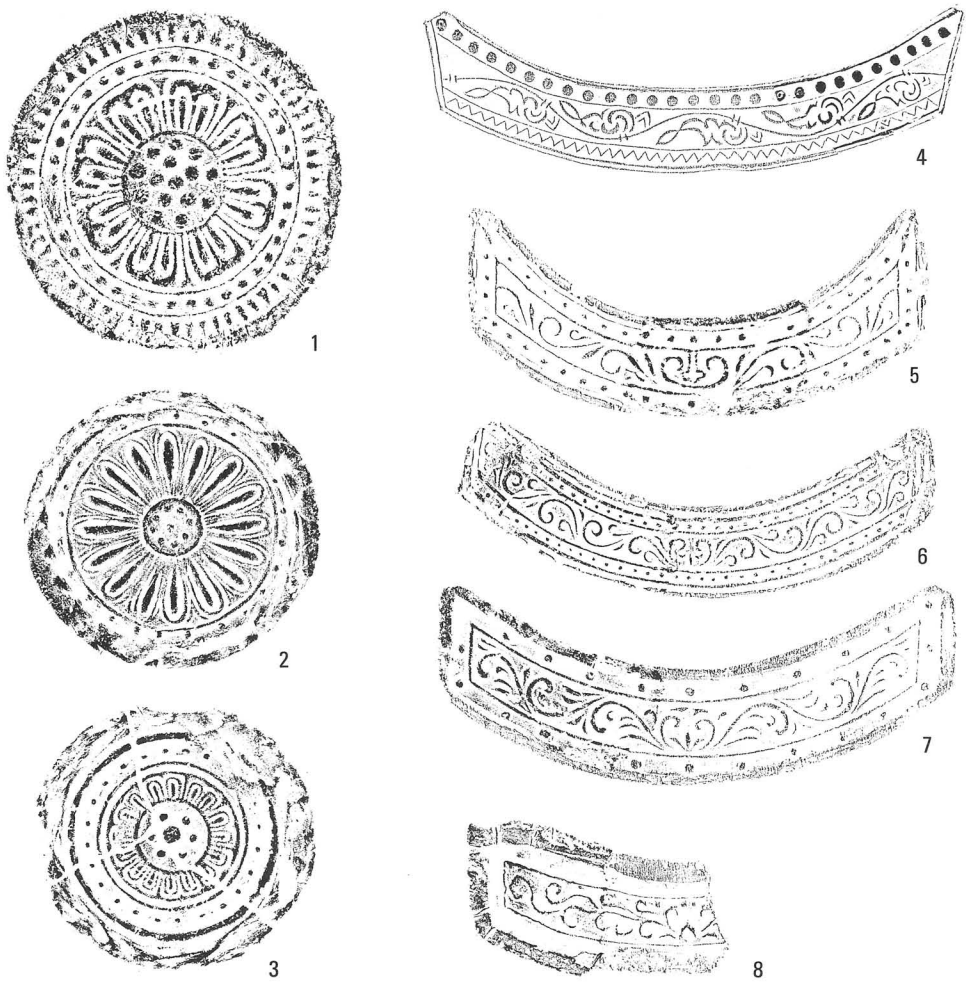

fig. 23　軒瓦

3．金属器・土製ほか（PL.16）

井戸ＳＥ0540から鉄鎌、木製杓子、るつぼが出土した。ＳＢ0545付近の柱穴からは和同開珎が４枚以上重なって出土したが遺存状況は悪い。また他の小土壙から銭種不明の銅銭１枚が出土している。他に刀子、海老錠の鍵、鉄角釘、用途不明の鉱石数個が出土した。

鎌(fig.24－１）は左右両端を欠失しており、現存長15cmある。刀子の身(２)と海老錠の鍵は錆びついて形は不明であったが、Ｘ線透過で原形を知り得た。

木製杓子(３)はイスノキの樹皮つき心持材を使用しており、平面形は短径が約６cmの楕円形を呈する。外面下半は刃幅の広い刀で荒く面取りし逆円錐形となる。内面は幅狭い丸ノミで丹念に刳っている。一方に断面方形の把手を造り出している。

るつぼ(４)は高さ18.7cm、口径9.8cmで、砲弾形をしており、壁体は部厚く作られ、砂粒が多くて粗い。外面は斜格子タタキ目で覆われており、内面は黄味がかった淡い緑色のガラス釉が一面にかかり、さらにその上に白色釉が流下して底部に厚く溜っている。分析の結果、この両釉から多量の鉛が検出されたことから、恐らく鉛ガラスを溶解したものと考えられる。緑色ガラスには着色のため銅が入っている。このように内面に緑色ガラスが付着した砲弾形のるつぼは、平城京東市跡の堀河からも1975年に出土している(口絵上右)。

土壙ＳＫ0625から出土した鉱石（口絵下）の破断面は、赤色から橙黄色の短柱状結晶を呈している。Ｘ線回折分析の結果、硫化砒素(AsS)が大半を占め、石英などの鉱物が少量混入することで鶏冠石と認められた。特殊な鉱石であり薬物として利用した可能性もある。

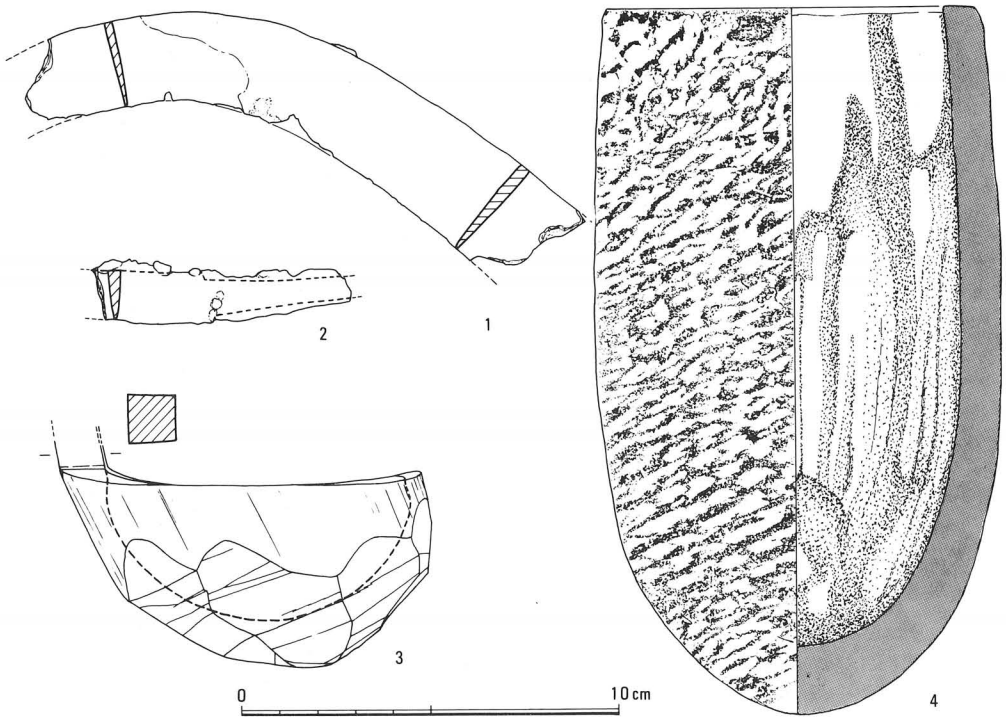

fig. 24　金属器・木器ほか